第2回磐田市民文化会館跡地利活用懇話会　会議録

1 日 時

令和2年2月 16 日(日)　13 時 30 分～15 時 10 分

2 会　場

磐田市役所本庁舎4階　大会議室

3 出席者

懇話会メンバー17 名（オブザーバー3 名を含む）
佐藤　健司(静岡理工科大学　理工学部教授)
水野　勲(磐田市自治会連合会　磐田支部長)
杉浦　聖(磐田市自治会連合会　福田支部長)
藤田　允(磐田市自治会連合会　竜洋支部長)
島岡　信生(磐田市自治会連合会　豊田支部長)
深田　研典(磐田市自治会連合会　豊岡支部長)
山口　のぞみ(磐田なかよしこども園　PTA 会長　)
山内　秀記(福田小学校　PTA 会長)
岩崎　哲也(豊田南中学校　PTA 会長)
大庭　竜介(三十祭実行委員会　元委員長)
中井　千江里(いわたゆきまつり実行委員会　前委員長)
青野　匠真(静岡大学工学部)
奥田　莉菜(常葉大学法学部)
山内　悠(磐田農業高等学校)
西田　英一(静岡理工科大学理工学部)　オブザーバー
濱田　幸汰(静岡理工科大学理工学部)　オブザーバー
名倉　颯人(静岡理工科大学理工学部)　オブザーバー
※3人欠席
山下　貢史(みんなで軽トラ市 いわた☆駅前楽市　実行委員会)
鈴木　清晃(豊岡中学校　PTA 会長)
山本　楓恋(磐田農業高等学校)

事務局7名

鈴木　雅樹（秘書政策課長）

伊藤　豪紀（秘書政策課　部付主査兼政策行革推進グループ長）

松下　公彦（秘書政策課政策行革推進グループ　主任）

鈴木　基輝（秘書政策課政策行革推進グループ　主任）

松下　隆（秘書政策課政策行革推進グループ　副主任）

谷野　敦哉（秘書政策課資産経営準備室　主任）

寺田　展浩（秘書政策課資産経営準備室　副主任）

傍聴者7名

4 内 容

(1) 開会

(2) 意見交換

資料1　資料2（事務局説明）

グループワーク（テーマ：まちの「にぎわい」の創出と活性化について）

Aグループ

【にぎわいのある場所とは】

・上岡田の飲食店が並んでいる通り

・浜松市のラウンドワンは若い人、家族連れが多くにぎわいがある

【磐田市の現状と課題】

・大きい商業施設が郊外に出来て中心市街地が寂れてきている。中心市街地に大型施設をつくるとなると土地の確保など難しい面があるため、磐田らしさ（歴史、スポーツなど）を生かしたまちづくりが重要。

・中心市街地に定住できる、したくなるまちづくりを進めていかないと、イベントをやっても一過性に終わってしまう。

・場当たり的な取組みより、持続可能な取組みが重要。

・大型商業施設など、利便性が郊外に移ったが、中心市街地ににぎわいを作らないと長続きしない。郊外の商業施設は、一時はにぎわいができるが、廃れると撤退も早い。

・磐田市は、イベントをやると地域密着で盛り上がっていると思う。一方で、住み

やすさとにぎわいは表裏一体。にぎわいが生まれると渋滞など、住みにくさもあり別物だと思う。
・車が使える間は問題ないが、車が使えないお年寄りなどのことを考えると、歩いていけるまちづくりが必要。

【皆さんが考える“にぎわいがある”と“活性化”の状態とは】
・文教施設がないと“にぎわい”は生まれない。飲食店だけでは夜は栄えるが昼は人が集まらない。学校、図書館、病院、公園など毎日の生活に関わるものが一つにまとまる地域づくりが重要。
・定住しないと栄えない。行政が長期的な視点で施策を打たないとダメ。
・生活の延長線上ににぎわいがある。その視点として、学校、大学などの文教施設が重要。

【人が住んでいることが要件ではあるが、どんな状態が理想か】
・学校、公園、病院、子育て支援センターなど、生活の一部が溶け込んでいるまち。
・歩いていける距離に適正な施設が分散して配置することも重要。大型化して郊外に集中するやり方は限界にきている。
・地域で顔の見える関係づくりが“にぎわい”のあるまちづくりにつながる。助け合いの精神が大切。
・病院や学校、公園、図書館など人の行き交いがある視点が重要。

Bグループ

・磐田駅周辺は、暗い雰囲気があることが課題である。
・明るい雰囲気にするためには、夜間でも人が集まりたくなるように灯り（明かり）が必要である。
・「ラウンドワン」のような遊びの施設は、街の賑わいを創出するためには必要。
・駅からジュビロード、市民文化会館跡地、今之浦公園に回遊性をもたせ、全体が盛り上がるような工夫が必要
・地元住民だけでなく、磐田市全体から人が集まるように、交通機関を含めた動線の確保を検討する必要がある。
・休憩する場所がないと人は集まらない。スーパーのイートインスペースのようなものも必要である。
・市が単独で施設を整備しても良いものができるとは思えないし、市の維持管理費を減らすことも考えなければならない。民間の知恵と力を活用し、企業と連携して整備することが必要不可欠である。

Cグループ

「にぎわい」のあるまちやまちの「活性化」のイメージについて

■人が多く集まる

・市外・県外から人が来るまち

・外国人が来たくなるまち

・地元に居たくなる・離れたくないまち

・おしゃれな店や施設が多く集まるまち

⇒シンボル的な場所が必要、情報発信の工夫、市民が誇れる場所

■イベントの開催

・定期的に開催

・企業とのタイアップ

・ターゲットを絞ったイベントを数多く開催

■企業との連携

・民間資本の導入

・お金が稼げる

・市と民間企業の連携

■雰囲気

・明るい

・解放感がある

・日常・日課の一部となる場所は賑やかである

・磐田らしい落ち着いた雰囲気

・多くの人が長い時間居たくなる

■優しい環境

・子育てしやすい

・子どもだけで外を歩いても不安にならない

・高齢者にやさしい（買い物など）

・趣味・仕事など生き生きと活躍できる

講評（佐藤教授）

〇私のグループでは、「にぎわい」はどうすればできてくるのかについて検討した。

〇「にぎわい」の基礎は、「人が住んでいること」という意見があった。「人が住める街」であることが大切。

〇まちづくりにおいて、この 20～30 年で「選択と集中」が進んだが、街から離れた郊外にある大規模病院や商業施設など、街から離れた場所に集中しすぎた感がある。

〇「選択と集中」の対となる言葉は、「分散と多様性」だが、大学教育において、今後、学生数の減少が見込まれる中、留学生や社会人などの多様な学生の確保と、それに対応できる教員の多様化が求められている。

〇同様に、まちづくりにおいても、「選択と集中」による、郊外の大規模な箱ものではなく、病院や職場などの生活に関わるものが住まいの近くにあるような、「分散と多様性」による「人が住める街」となることが必要ではないかと感じた。

(3) 今後の予定

(4) 閉会

以上